

Title	幼児向絵本を使ったフランス語教育実践：半過去と完了過去
Sub Title	Utilisation d'un livre d'enfants dans le cadre de l'enseignement du FLE en université : exemple avec l'imparfait et le parfait (passé simple et passé composé)
Author	黒木, 朋興(Kuroki, Tomooki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.71 (2020. 10) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20201031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

幼児向絵本を使ったフランス語教育実践

——半過去と完了過去——

黒 木 朋 興

はじめに

まず、日本人のフランス語学習者にとって分かりづらい文法事項の一つである半過去を複合過去や単純過去といった完了過去との対比で説明し、その用例として幼児向けの絵本をみる。それからその絵本を使った授業例を紹介し、このような教授法の可能性を考えることをこの論考の目的とする。

半過去の難しさは、半過去単独での説明が困難なことにあると言えるだろう。半過去の意味は完了過去との対比の上で決まる。ところが、概して日本のフランス語の授業では、活用を覚えさせることに重点を置くためか、複合過去と半過去の説明が別々になされる。対して、ここでは完了過去と半過去を対比することによって、それぞれの過去形の使い分けを説明する。

そして、この両者の使い分けの実例として、ステファニー・ブレイクの『Caca Boudin』¹⁾(邦訳『うんちっち』)という幼児向けの絵本を取り上げ、更にこの絵本を用いた授業法として朗読の練習をした授業を紹介する。

なお、完了過去と半過去の説明に関しては、言語学の先行論文をまとめたものではなく、フランス語の恩師であるガブリエル・メランベルジェ先生に教わったことを基に、筆者の博士論文の副査であった言語学者のフランソワーズ・ドゥエ氏や慶應義塾大学でフランス語教師を務めるパトリス・ルロ

1) Stéphanie Blake, *Caca boudin*, l'école des loisirs, 2004 ; 『うんちっち』、ふしみさを訳、PHP 研究所、2004.

ワ氏と議論しながら筆者が理解したことを中心にまとめる。

半過去と完了過去

半過去と完了過去をフランス語で書くと、それぞれ「le passé imparfait」と「le passé parfait」になる。これを直訳すると「未完了過去」と「完了過去」になる。通常「l'imparfait」は「半過去」と呼ばれているので、この論考でもこの訳語で統一するが、原語を確認することによってこの二つの動詞には完了／未完了という対比があることがわかる。この完了過去には単純過去（le passé simple）と複合過去（le passé composé）があるが、現在では単純過去はほとんど使われない。また、多くの教科書は半過去と複合過去の違いを説明するのみであり、完了／未完了の対比が見えにくくなっている。なお、この完了／未完了の対比で過去の描写を行うのは、ラテン語から派生したロマンス諸語の特徴であり、英語やドイツ語などのゲルマン系の言葉にはないことを言い添えておく。

ここでは半過去と完了過去の違いを、以下の三つの定義によって説明してみたい。

	半過去	完了過去
1	線	点
2	未完了	完了
3	背景（décor）の描写	物語・出来事の説明

1 線と点

まず、線と点から説明してみよう。以下の例文を見てもらいたい。

Quand je lisais un livre, il est entré dans la chambre.

私が本を読んでいた時に、彼は部屋に入ってきた。

 で囲んである部分が半過去、 を引いてある部分が完了過去である

複合過去だ。本を読むという行為には一定の時間がかかることからその時間は線で表すことができるのに対し、部屋に入ってくるという行為は一瞬の出来事であることから点で表すことができる。このように動詞の単なる意味ではなく、時間軸や空間を含む意味のことを言語学の用語でアスペクトということをもまず言っておく。このように半過去と完了過去のアスペクトは線と点で表すことができる。

明快で分かりやすくはあるが、この定義で説明しきれない用例がある。以下の文を見てみよう。

J'ai dîné avec lui pendant une heure.

私は彼と1時間にわたって夕食を取った。

ここの「夕食を取った」というのは完了過去（複合過去）であるが、「1時間にわたって」とあるので、この「ai dîné」という動詞のアスペクトは点ではなく線である。

また、半過去の意味を「過去における反復」と説明する教科書や参考書があるが、同じ理由で問題があることになる。

On se voyait tous les jours.

On s'est vus tous les jours.

私たちは毎日会った。

上は半過去、下は完了過去（複合過去）である。この場合、この2つの文を過去の種類によって訳し分けることは困難で、同じ訳になってしまう。どちらも「毎日 (tous les jours)」と付いているので、反復する行為であることがわかる。つまり、完了過去（複合過去）だからと言って、アスペクトが線であることもあり得るし、あるいは反復する行為を表すこともあるということになる。線とか反復という表現を使った説明は導入として分かりやすくはあるが、アスペクトが線であったり反復していたりするからと言ってすべ

てが半過去になるわけではないということに注意する必要がある。

2 未完了と完了

これは *imparfait* と *parfait* の意味そのものである。

ここで一つの逸話を紹介しよう。ある日の昼過ぎのこと、フランス人のジャン＝フィリップ・トゥフユという経済学者の友人から国際電話がかかってきた。簡単な打ち合わせの後、彼は東京の天気を聞いてきた。そこで答えたのが以下の文である。

Il a plu ce matin.

朝は、雨が降っていた。

すると彼は「今は晴れているのかい？」と聞くので「そうだ」と答えると、「流石、複合過去の使い方、完璧だ」と返ってきた。

完了過去ということは、行為が既に終了しているということだ。つまり複合過去で断言している以上、雨が降り止んでいなければならず、それで彼は晴れているのかどうかを聞いてきたのだ。雨が降るということは、アスペクトは点ではありえない。一定の時間、水滴が空から落ちてくる現象のことを雨が降っているという。となれば、この例文では線と点の説明は使えない。そこで持ち出されるのが完了という説明になる。この複合過去の用例では、雨が降り止んでいることが含意されているのだ。

この用例として有名なものに次の文がある。

Il a vécu.

彼は生きた。

この場合、この「彼」は死んでいる。また、生を営むということは一瞬、つまり点ではありえない。というわけで、この文の複合過去の説明も点ではなく完了ということになる。また、この用例は生きるという意味の動詞を使っ

て逆の意味の死を表しているレトリックの例としても有名である。

ここでフランス語の複合過去には、同じように「助動詞 (have) + 過去分詞」で作る英語の現在完了の「過去に開始されて現在も続いている」という意味がないわけではないが、極めて少ないということを指摘しておきたい。フランス語の複合過去は英語の現在完了と違って、ほとんどの場合過去において完了した行為を指し、現在までは含まない。例えば、フランス語の教科書で時折見かける以下の文ついて考えてみたい。

J'ai aimé ce film.

私はこの映画が好きだった。

現在の文である「J'aime ce film.」（私はこの映画が好きだ）を複合過去に直しなさい、などといった文法問題として出題されることがある。確かに、上記の文は文法的には間違っていないが、どういう意味だろうか？ かつて映画を観て好きになったとすれば、普通は現在も好きなまものはずである。それがかつて好きだったのに今は嫌いになってしまっているのだとすれば、なにか特殊な事情があったことが推測される。例えば、恋人とデートで観た作品だったがその後酷いふられ方をして、その人にまつわるものは全て嫌いになってしまったという物語が想像できるだろうか？ しかし、実際にそのようなケースはどの程度あるものなのだろうか？ 実際の運用を考えると不自然な感じがするのは否めない。

ところが、ある日パリの経済研究センターのオフィスで上述の経済学者ジャン＝フィリップにこの文について話をした時のこと、しばらくして彼が突然「J'ai aimé ce film が言える状況を思いついた」と言ってきた。彼の説明によれば、映画を観終わった後、映画館を出ながらであればこのセリフはあり得る、とのことであった。この場合、好きという感情が完了するのではなく、映画を観る行為が完了したことを示す。となると、日本語訳は「私はこの映画が好きだった」ではなく、「この映画、とてもよかった」あるいは「この映画、とても気に入った」になる。

ただ、複合過去に現在まで続く用例が全くないわけではないことには注意しておく必要がある。例えば、デザイナーであるイヴ・サン＝ローランがインタビューで発言したこの言葉を引用してみたい。

J'ai, depuis longtemps maintenant, cru que la mode n'était pas seulement faite pour embellir les femmes, mais aussi pour les rassurer, leur donner confiance, leur permettre de s'assumer.

私は、随分前から現在に至るまで、ファッションは女性を美しく飾るだけではなく、女性に安心と自信を与え、自分を引き上げ肯定できるようにするものだと思ってきた²⁾。

「現在に至るまで」という言葉が付いているので、現在までかかっていることがわかる。インタビュアーへの返答として自分の今までの人生を振り返り、このような信念を持って仕事をしてきました、という意味だろう。「過去に開始されて現在も続いている」という用例が皆無というわけではないが、かなり稀であることを指摘しておく。

3 背景 (décor) と物語

最後に半過去の最も重要な機能である背景 (décor) の描写について説明したい。現在の辞書でこの言葉を引くと演劇用語として「舞台装置／大道具」といった意味がすぐに見つかる。現代では舞台上に建てられた立体のセットを想い浮かべる人が多いだろう。しかし、19世紀以前において「décor」とは「書割」つまり舞台の背後の幕に描かれた絵のことを指す。下にあるのはパリのオペラ座で上映されたジャコモ・マイヤベーアのグランド・オペラ『悪魔のロベール』のためにピエール・チチュリが描いた décor = 書割である。一点透視法が用いられており、絵でありながら舞台上に三次元の建物があるように見える。しかしこれは二次元上に描かれた絵なのであ

2) https://www.lepoint.fr/culture/yves-saint-laurent-sa-vision-de-la-mode-et-des-femmes-28-09-2017-2160525_3.php



る。

当時、なぜ三次元の物体を舞台上に置けなかったのかといえば、照明の光が弱かったからである。電気照明出現以前の蠟燭やランプの光ではスポットライトとして天井から床の上の物を照らすだけの光量がなかったのだ。というわけで、舞台奥にある絵に蠟燭やランプで光を当てて、立体的な物体が舞台上にあるかのように見せる演出をした。役者の顔に当てる場合も照明はフットライトという形で舞台の最前面の床に仕込んでいた。これは炎が下から上に上がる性質を持つという理由と天井よりも床に照明を設置するほうが役者の顔に近くなるという理由による。例えば、エドガー・ドガのバレリーナを描いた絵を見れば、光が下から上に向かって照らしていることが確認できる。なお、スポットライトを上吊り、舞台上に立体物を置けるようになったのは電気照明が発達する 20 世紀に入ってからのことだということを言い添えておく³⁾。

décor = 書割とは、舞台の奥に架けられている絵のことである。そして半過去の機能とは、この décor = 書割を描写することなのだ。重要なのは、半過去の物語が進行する舞台となる情景を描くことはあっても、決して物語の

3) ヴォルフガング・シヴェルプシュ、『闇をひらく光』、小川さくえ訳、法政大学出版社、1988、pp. 197-222。

進行を叙述していくことはできない。例えば、劇場で舞台のセットの上に照明が当たっていても、役者がまだ登場していない舞台装置だけの状態ではまだ芝居は始まっていないということになる。舞台上にホテルのロビーのセットが組んであれば、観客は「ああ、ホテルを舞台に物語は展開するのだな」と思うだろう。そのような場面を描写するのに使われるのが半過去である。対して、舞台上に役者が登場し、何か台詞を発するなり何らかの動作を行うと物語が始まる。この物語の流れを追うのが完了過去の役割なのだ。

例えば、昔話の例で考えてみよう。

昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが①暮らしてました。
 毎日、おじいさんは山に芝刈りに②行き、おばあさんは川に洗濯に③
 行っておりました。ある日、おばあさんが川で④洗濯をしていると、上
 流から大きな桃が⑤流れてきました。

『桃太郎』である。これをフランス語に訳す場合、上に示した冒頭の五つの動詞をどう訳すかを考えてみよう。「昔々」で始まるので当然過去である。この五つの動詞を半過去と完了過去のどちらにするのが良いであろうか？この話はどこで物語が始まるかという、⑤の桃が流れてきた時点である。よって⑤は完了過去になる。対して、①から③までは老夫婦の日常生活を描写しているだけで、物語は始まっていない。このまま、桃が流れてこなければ、事件は起こらず桃太郎の物語は成立しない。というわけで、①から③は décor = 書割の描写ということで半過去になる。また、④も「桃が流れてくる」という事件が起こったときにおばあさんがしていたことなので、décor = 書割の描写ということになり半過去である。

この後、おばあさんが桃を家に持ち帰り、おじいさんと食べようと桃を切ると中から桃太郎が登場する。その桃太郎がやがて成長し、鬼ヶ島に鬼退治に行くことを決め、おばあさんは桃太郎のために黍団子を作る。桃太郎は鬼ヶ島へと行く道すがら、犬と猿と雉子に出会い彼らを家来にする。鬼ヶ島に赴き鬼たちを成敗した後、おじいさんとおばあさんのもとに帰り、みんな

で幸せに暮らすようになった。以上が物語の内容であり、このことを叙述するのに完了過去を使う。

対して、「晴天で空には雲一つ浮かんでいませんでした。すると前から犬がやって来ました」という文を考えた場合、晴れていて雲がないというのは *décor* = 書割の描写なので半過去になる。対して、犬がやって来たというのは完了過去だ。このように、半過去の機能というのは、*décor* = 書割と物語の対比、つまり完了過去との対比によってこそはっきりと浮かび上がるのである。

例えば、前述の「私たちは毎日会った」という文を考えてみよう。

1 Nous étions à Cassis en vacances. Nous avions 17 ans. On s'est vus tous les jours.

僕たちはバカンスでカシスにいた。17歳だった。毎日会った。

2 On se voyait tous les jours. Mais elle est partie sans dire au-revoir…
私たちは毎日会った。でも、彼女はサヨナラも言わずにいなくなってしまった。

1の場合、17歳の時にカシスという街にバカンスを過ごしに家族で滞在していた、というのが、物語が始まる前の状況、つまり *décor* = 書割である。対して、同じように家族で訪れていた相手と出会い、瞬間に恋に落ち、毎日のようにデートをした、というのが物語内容で「毎日会った」という表現の完了過去によってそのような恋物語が説明されている。対して、2の場合、「毎日会った」というのが状況説明で、そこに突然恋人がいなくなってしまう、という事件が起こったことが説明されている。

以上のことから、半過去の意味というのは、物語が起こる場面の状況説明、つまり *décor* = 書割の描写であり、完了過去との対比の上で理解されるということが確認できる。

幼児向け絵本を使った実践例

だとすれば、その理解のためには現代小説よりも、昔話など古いスタイルの物語の方が理解しやすいということになるだろう。なぜなら、昔話は「昔々あるところに」（英：Once upon a time / 仏：Il était une fois / 独：Es war einmal）という出だしで、必ず décor = 書割の描写から始まるので、完了過去との対比が明瞭だからである。これが現代小説の場合では、読み手の関心を引くためにわざと出だしを飛ばして、いきなり「彼は走った」（Il a couru.）と完了過去で物語を始めることも可能であり、未完了／完了の対比ははっきりとしないことが多い。初学者にとってはわかりにくいだろう。

授業例の説明に入る前に、共に完了過去である単純過去と複合過去の違いについて最初に説明しておこう。なぜなら、幼児向け絵本には、現在ではほとんど使用されることがない単純過去が使われるからである。

単純過去はラテン語以来の正式な過去形で現在では特定の書き言葉の文章の中にしか使われない。対して、複合過去は元々話し言葉のための過去形だったが現在では書き言葉にも話し言葉にも一般的に使用される。

活用を見てもよう。「話す」（parler）という動詞の一人称単数の活用は「単純過去：Je parlai」「複合過去：J'ai parlé」である。単純過去は parler という動詞の語幹に、「avoir」という動詞の活用形「ai」という語尾をつけて一語で活用する形である。このような活用の仕方のことを言語学の用語で統合的という。複合過去はその「ai」を助動詞として前に持っていきその後完了過去分詞を置き2語で活用している。これを分析的という。元々の正式なラテン語の活用は統合的であったが、ローマ帝国が領土を広げ様々な地域の庶民にラテン語が広まっていくに従って、分析的な活用が登場したと言われる。分析的な活用が話し言葉向けとされるのは、ここに由来する。

この二つの過去形の意味の違いはアスペクトにある。つまり時間の流れが単純過去は一点なのに対し、複合過去は幅を持っているのである。例えば、次の文を考えてみる。

J'ai vu un homme qui a battu mon chien.

この文の場合、「私は私の犬を殴った男に会った」という訳になるのか「私はある男に会ったが、その男は私の犬を殴った」という訳になるのか分からない。つまり、私が男に会ったのが先なのか、男が犬を殴ったのが先なのか判断がつかないということだ。いわゆる悪文ということになる。男に会うのが先でそれから男が犬を殴ったのなら、次のように殴るという動詞を条件法にして「過去における未来」を表す必要がある。

J'ai vu un homme qui battrait mon chien.

殴るのが先で会うのが後の場合は大過去を使う。

J'ai vu un homme qui avait battu mon chien.

対して、単純過去のアスペクトは点なので、動詞が出てくる順番で事象が起こることになる。

Je vis un homme qui battit mon chien

つまり、単純過去で書くと必ず男に会うのが先で、殴ったのが後という意味になるのだ。

以上から、複合過去より単純過去のほうが半過去との対比がつきやすいことが分かるだろう。

以下、子供向けの絵本である『Caca Boudin』を使った授業を紹介していきたい。まず、『Caca Boudin』のあらすじを簡単に説明する。

あるところにウサギの男の子がいた。彼は何を言われても「うんちっち(= Caca boudin)」としか答えない。「お前を食べても良いかい」と言う狼にも「うんちっち」としか答えず、食べられてしまう。その狼は家に帰ると

具合が悪くなりお医者さんをお呼ぶ。そして医者のお問診に狼は「うんちっち」と答える。そこでウサギの子の父親であったその医者には、狼が自分の息子を食ったことを知り、狼のお腹に入って息子を助け出す。その日、家に帰るとウサギの子は流暢に言葉を話し出す。ところが、次の日の朝、父親が話しかけると「おならぶー (Prout!)」と答える。

冒頭を引用してみよう。

Il ① était une fois, un lapin qui ne ② savait dire qu'une chose... Caca boudin. Le matin, sa maman lui ③ disait : « Debout, mon petit lapin ! » Il ④ répondait : Caca boudin. Le midi, son papa lui ⑤ disait : « Mange tes épinards, mon petit lapin ! Il ⑥ répondait : Caca boudin. Le soir, sa grande sœur lui ⑦ disait : « Viens prendre ton bain, mon petit lapin ! » Il ⑧ répondait : Caca boudin. Un jour, un loup lui ⑨ dit : « Je peux te manger mon petit lapin ? » Il ⑩ répondit : Caca boudin. Alors, le loup ⑪ mangea le petit lapin.

昔々あるところに、うんちっちとしか② 言わないウサギが① いました。朝、お母さんが③ 言いました。「起きなさい、私のウサギちゃん！」彼は④ 答えました。「うんちっち」。昼、お父さんが⑤ 言いました。「ほうれん草を食いなさい、私のウサギちゃん！」彼は⑥ 答えました。「うんちっち」。夜、お姉さんが⑦ 言いました。「お風呂に入りなさい、私のウサギちゃん！」彼は⑧ 答えました。「うんちっち」。ある日、狼が⑨ 言いました。「お前を食べて良いかい、私のウサギちゃん？」彼は⑩ 答えました。「うんちっち」。すると、狼はウサギの子を⑪ 食べてしまいました。

ここでは会話の中の現在形は除いて、地の文の過去形だけを取り上げる。①から⑧までは半過去が用いられている。ということは、ここまでは物語ではなく、ウサギの一家の日常生活を描写したものということになる。「うんちっち」としか言わないウサギの子の一家は、ルーティーンを朝昼晩と繰り返

返す日々を送っていたということだ。ところが、「ある日」事件が起こる。狼がやって来てウサギの子を食べてしまうのである。⑨から⑪までの動詞は単純過去である。日常生活を送っていたところ、「ある日」日常とは異質の特別な事件が起こり、物語が展開していくという流れは明らかである。

ここで「言う」(dire)と「答える」(répondre)に注目してみよう。③④⑤⑥⑦⑧の部分は半過去であるのに対し、⑨⑩は単純過去である。日本語にすると「言いました」と「答えました」のように同じ訳になってしまう。しかし、意味は同じでも機能は、半過去が décor = 書割を描写しているのに対し、単純過去(完了過去)が物語を展開させているのが分かる。

幼児向絵本が教材として優れている点は、内容が簡単であることに加えて、半過去と完了過去の対比が明快であることが挙げられる。また、朗読を練習するための教材として相応しいことも強調しておきたい。残念なことに日本では、語学や文学のクラスで朗読に時間が割かれることはほとんどない。朗読とは単に正しい発音で文を読むだけの行為ではない。内容をきちんと理解した上でしっかりと自分なりの解釈を行い、それを音読に上手に反映させることを言う。本来、詩や演劇などを中心に文学教育の現場で朗読は重要である。対して、日本の外国語教育の現場では、時間的な制約がある上に、そもそも普通の講読のクラスで取り上げられる文章は朗読のためには少々難解すぎることは否めない。それを考えれば、幼児向絵本は子供に朗読してやることを想定しているだけでなく、子供が朗読することも想定して書かれている。音楽の楽曲を演奏する時のように、解釈によっていろいろな朗読があるということを理解するためにも、簡単なテキストを選ぶことのメリットは大きいと言すべきだろう。

ここでは YouTube に上げられているフランス人の幼児が母親の前で自慢げにこの絵本を朗読する動画を取り上げたい⁴⁾。得意げにページをめくるこのエラという女の子はフランス語を読んでいるというよりは、読んでもらったお話を、絵を見て思い出しつつ語っているようである。ここでそのエラの

4) <https://youtu.be/kqZgWQbzkJU>

朗読の様子を書き出してみよう。なお、() 内は母親の言葉である。

(Vas-y. Commence ton histoire, Ella !) Il était une fois, un petit lapin qui savait dire qu'une chose... Caca boudin. Sa maman lui disait le matin : « Mon petit lapin, lève-toi » Il répondait : Caca boudin. Son papa lui disait : « Mange tes épinards, mon petit lapin ! Il répondit [répondait] : Caca boudin. Le matin, sa grande sœur lui disait : (Il disait quoi ?) « Viens prendre ton bain, mon petit lapin ! » Il répondait : Caca boudin. Un jour, un loup venait. Il disait [dit] : « Je peux te manger mon petit ? » Le petit répondait [répondit] : Caca boudin. Là qu'est-ce qui va passer après ? Il mangea le petit lapin. (C'est pas vrai !) Si. (Ben oui. Il est tout gros. La suite ?) Le matin il rentra chez lui. Sa femme lui disait [dit] : « Ça va, mon chéri ? » Il répondit : Caca boudin. (Ah le loup aussi dit ça !) Maintenant le loup qui dit : (Ah d'accord.) Caca boudin. (Oh là là ! Comment ça va se finir cette histoire ?) Le matin, le loup, il appela le médecin. Le médecin lui dit : « Faites aah... » Le loup répondit : Caca boudin. (Attend, attend, attend. T'as oublié. Il dit quoi, le lapin, le médecin ? Là, regarde. Il dit : « Vous avez..) « Vous avez mangé mon petit lapin ! » (Ah c'est le papa ! D'accord.) Alors le papa qui n'avait pas de peur de rien alla chercher son petit lapin dans le ventre du loup. Quand le loup le retrouva, il dit : « Ah ! mon petit Caca boudin ! » « Comment ? Je m'appelle comme ça. Je m'appelle Simon. Tu sais ! (Ben oui.) Tu le sais ! Ben non, c'est lui. » En rentrant chez lui, sa maman lui dit : « mange ta soupe mon petit ! » « Oh oui ! comme elle est douce ! » Son papa lui dit au début : « Vas te laver les dents, mon petit lapin ! » Il réponda : Prout !

絵本のフランス語と比べると、細かい違いが多数ある。やはり、完全に文字を読めるのではないようだ。原文と違っている箇所に二重下線を引いた。更

に、半過去と単純過去を取り違えている箇所に関しては、動詞の語尾を太字イタリックにして [] 内に正しい活用形を付け加えた。また、彼女が飛ばした箇所については何も記さなかった。細かい違いはあるものの、物語の大筋に大きな変化はない。

動詞の過去形を取り違えた箇所が四つある。ということは、彼女は半過去と完了過去の違いをマスターしていないということだろう。

絵本を一冊読み上げた動画の中のエラという少女は母親に向かって自慢げな表情を見せる。最後には彼女の父親が「ブラボー、エラ！」と声をかけている。ここから私たちは、絵本の読書を通じてフランス人がどうやってフランス語を身につけるのかを垣間見ることが出来る。日本人の学習者が苦手とする半過去と完了過去の使い分けを習熟していく様がこの動画には表れているということだ。ネイティブだからと言って最初から習熟しているわけではなく、このような絵本の読み聞かせや朗読を通して、何回も間違えながら徐々に身につけていくのである。

もちろん、幼いエラはこの日のことを大人になる頃にはすっかり忘れているだろう。私にしたところで、自分がどのように日本語を身につけて来たかは覚えていない。だからこそ、このような動画で確認することによって、言語の習得を体験することが出来るのではないだろうか？

以上のことを踏まえて、日本人のフランス語学習者がこの絵本の朗読を試みることの意義について考えてみたい。この少女の動画を参照し子供が言語を習得していく様を体験しながら、上で述べた半過去と完了過去の使い分けを確認することはフランス語の過去形の理解に役立つことだろう。また、子供のように朗読を試みることは、言語教育の上でも文学教育の上でも、絶大なる効果が期待できる。朗読は、単にそれぞれの単語を正確に発音できればそれでよしとする音読とは違う。きちんと内容を把握して文意を解釈し、それを読みに反映させることが出来てはじめて朗読と言えるのだ。ところが、大学の授業等で扱うテキストは、たとえ和訳することが出来ても上手に朗読するには少々難しすぎる。だからこそ、幼児向絵本は半過去と完了過去の違いも明瞭であり、内容把握も比較的たやすく、朗読することを前提に書かれ

ているので朗読の練習の第一歩としては適しているのではないだろうか？
実際に、教室で学生に朗読の練習をさせた経験と学生時代に自身が演劇活動
をしていた経験から言えば、簡単な文章だとしても巧みな朗読はそう簡単
に出来るものではない。だから簡単なテキストから始めることはとても有意義
であるし、朗読の理解は文学や語学の学習にも極めて有益なものなのだ。

結 論

半過去と完了過去の説明は、多くの教科書や参考書に書いてある、線と点
だとか未完了と完了だけでなく、半過去が *décor* = 書割の描写であるのに対
し、完了過去が物語の説明という機能があることが確認できた。更に、それ
を具体的に見るために幼児向絵本は相応しいことが確認できた。なぜなら、
簡単なフランス語で書かれている上に、半過去と完了過去がはっきりしてい
るからである。何よりも、朗読のために書かれたテキストであり、入門のた
めの練習用の教材として大変適している。また、YouTube など動画サイトに
アップされているフランス人の幼児による朗読を参照することは、ネイ
ティブスピーカーの子供が自分たちの言語を習得する様を追体験できるとい
う点でも好ましい。以上から、朗読の難しさと重要性を体感する上でも朗読
の練習を授業に取り入れることは、大変有意義であることが確認できた。今
後も、絵本を使った朗読の教授法のいろいろな可能性を探っていきたい。